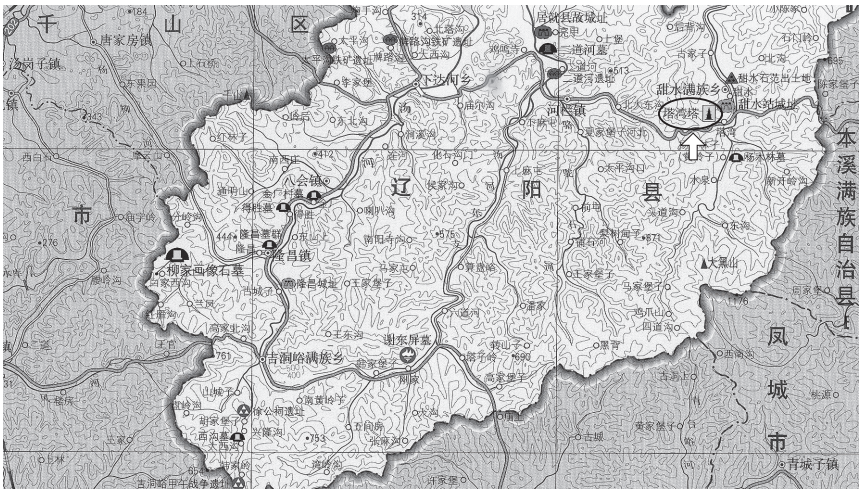
Ⅱ　「遼東仏塔初探―遼陽県塔湾塔について―」

藤原　崇人

1．はじめに

遼寧省の東部、省政府の所在地・瀋陽市のすぐ南に位置する遼陽市は、契丹（907-1125）および金（1115-1234）の治下において「東京」と号し、10世紀以降、遼東地域の一大拠点として栄えた都市である。この遼陽市に属する遼陽県に一座の仏塔が現存している。名を「塔湾塔」という。

遼陽をはじめとする遼東地域には、契丹から金にかけて建立ないし重修されたとみられる仏塔がいくつか残っている。遼陽市の白塔（広祐寺塔）、開原市の崇寿寺塔（石塔寺塔）、そして鉄嶺市の円通寺塔などが有名であり、これらについては、先行の調査報告や関連の考察を見出すことができる。[1] ところが上記の塔湾塔に関しては、簡単な紹介[2]はあるものの、本格的な調査や考察が付された



PL.1　塔湾塔の位置（国家文物局編［2009上：171］に加筆）

1　たとえば日本側の調査報告としては竹島卓一［1944］、竹島卓一・島田正郎［1976］などを挙げることができる。

2　王建学ほか編［2002：474-477］、葉麗緩［2003］、国家文物局編［2009下：309］。

形跡は認められない。そこで本稿では、この遼陽県塔湾塔を改めて紹介すると共に、本仏塔に対する初歩的な考察を試みたい。

2．遼陽県塔湾塔の概要

塔湾塔は遼陽県内東南の甜水満族郷塔湾村にある。本村には遼陽県と本溪満族自治県を結ぶ公路が走っており、この公路の側の小山上に屹立している（PL.1参照）。八角七層の塼塔であり、第二層以上のひさし（檐）の間隔が詰まった密檐様式をとる。基座から相輪までの高さは約20 m、各層のひさしの角には風鐸が下がり、初層のひさしのすぐ下には塼で斗栱が表現されている（PL.2参照）。

初層（第一層）は壁面積が最も大きく、塼造で荘厳をこらしている。すなわち八方の各壁面中央には、蓮華座に坐した尊像一体を配置し、その上方に天蓋と飛天一対を設ける。各壁面は仰蓮の基座をもつ柱で区切られている。八体の尊像は一見すると全て如来のように見えるが、そうではないようである。これについては次節で述べることにする。

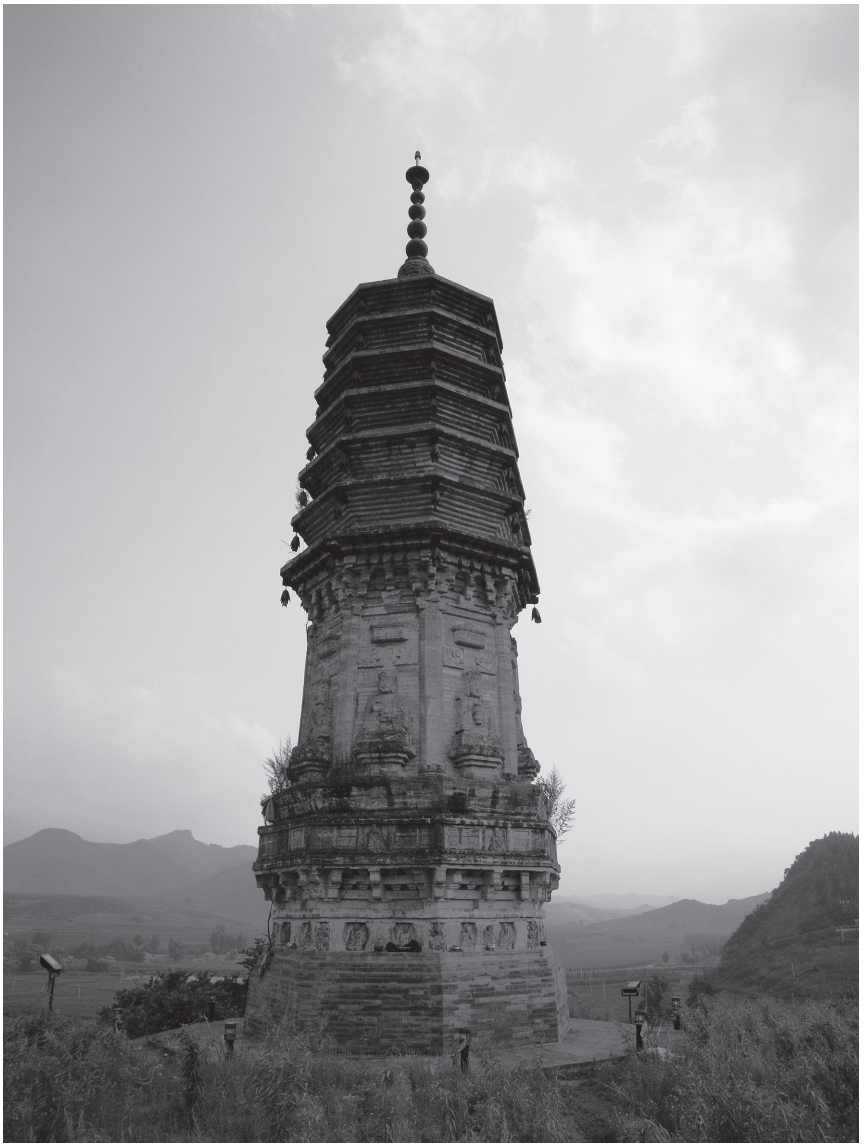
塔を支える基座の部分は、塼造の斗栱をはさんで上下の二層に分けることができる（PL.6参照）。上層の各壁面には欄楯を表現したと思しきレリーフが認められ、その中央に坐仏が刻まれている。下層の各壁面には一対の仏龕を設けており、そのなかに坐像が見える。各壁面の角には力士立像を配置している。

現在、塔の周囲には照明が据えられており、夜間はライトアップされているようである。筆者が訪れたのは日中であったため、残念ながら夜の闇のなかに浮かび上がる本仏塔のすがたを目の当たりにすることはできなかった。

塔湾塔の具体的な創建年次は不明であるが、契丹ないし金において建てられたものと考えられている。規模は異なるが、契丹所建の上京南塔[3]と形態が似ていること、そして後述のとおり初層壁面に密教尊と思しき尊像を配置[4]していることから判断して、契丹の時代に建立されたものである可能性が高い。

3　上京南塔は契丹の上京臨潢府城址（内モンゴル自治区バリン左旗林東鎮南）の南方の山上に現存する。八角七層の密檐式塼塔で、現高は約25 m、初層の各壁面に密教尊の塑像を配置していた［武田和哉編2006：37-38］。

4　契丹時代の仏塔のひとつの特徴として、密檐式塼塔の初層壁面における密教系尊格の塑像・レリーフの配置を挙げることができる［藤原崇人2013：93-94］。



PL. 2　塔湾塔

なお、本仏塔は1980年代に修復が施され、あわせて遼陽市の文物保護単位に編入されている。王建学ほか編［2002：475］には修復前の本仏塔の写真を収録しており、これを見ると相輪と風鐸が欠けている。現存の相輪と風鐸はこの修復工事によって新たに取り付けたものとみられる。初層および基座の尊像にも明らかに地色と異なるもの（箇所）や、不自然な像容を示すものがあり、これらも当該の修復工事の産物と思しい。

3．初層壁面の尊像について

下掲の表は、塔湾塔の初層壁面中央に配置された計八体の尊像の形態についてまとめたものである。本表を参照しつつ、各壁の尊像について眺めていく。

まず西・北・東壁の尊像は、頭部がやや盛り上がっている。これは螺髪を表現したものと考えられる。風雨にさらされ続けたことで螺髪は摩耗し、あたかも薄手の頭巾を被っているようにも見える。装飾品は帯びておらず、この三体の像は如来（仏）と判断できる。

一方、南・西南・西北・東北・東南壁の尊像は、すべて宝冠を戴き、装飾品（首飾り）を身にまとう。西南壁と西北壁の尊像には持物も認められる。南壁の尊像は独特の智拳印を結ぶことから、密教の金剛界大日如来とみて間違いなかろう（PL.3参照）。その他の四斜方壁の尊像は、一見すると如来のように思えるが、如来は一部の例外を除いて持物をもたない[5]。持物をもち、かつ宝冠と装飾

表１　塔湾塔初層各壁尊像の様態

所在	宝冠の有無	印相・持物	装飾品の有無
南壁	有り	智拳印	有り
西南壁	有り	胸前に両手を組み、数珠？をかける	有り
西壁	無し	定印	無し
西北壁	有り	右手に水瓶をもつ	有り
北壁	無し	説法印	無し
東北壁	有り	合掌？	有り
東壁	無し	両手で胸前に円？をつくる	無し
東南壁	有り	不明	有り

5　薬師如来は薬壺をもつことがあるが、西北壁の尊像の持物は形状から判断して明らかに水瓶であり（PL.4参照）、本像を薬師如来とみなすことはできない。

品を帯びるこれらの像は、菩薩とみるべきであろう。

つまり塔湾塔の初層壁面の尊像は、東・西・南・北の四方壁が如来像、その他の四斜方壁が菩薩像と考えられるのである。

智拳印を結ぶ南壁の像が金剛界大日如来であるほか、定印を結ぶ西壁の像が阿弥陀如来、水瓶をもつ西北壁の像が観音菩薩と推測される。その他の尊像の同定は現段階では難しい。東壁を阿閦如来、北壁を不空成就如来とみなせば、西壁の阿弥陀如来、南壁の宝生如来と入れ替えた大日如来によって、変則的な金剛界四仏を表現している可能性もあるが、他に同様の事例が確認されておらず、想像の域をでない。四斜方壁の尊像については、観音・文殊・普賢・弥勒の四菩薩と思われるが、西北壁の観音菩薩を除き、まだ個々の判別に至っていない。

最後に基座の尊像についても触れておく。これらの尊像は、あるものは摩滅が激しく、またあるものは不自然な改修が施されており、原形を留めているものがほとんどない。

上層については、南壁の尊像の保存状態が比較的良好であり、顔面は磨滅しているものの、宝冠を戴き、智拳印と思しき印を結んでいることが分かる（PL.5参照）。また東壁の尊像も、同じく磨滅が著しいが、触地印をとっていることが見て取れる。

下層の各壁に設けられた仏龕中の坐像はおそらく羅漢であり、各壁に二体ずつ、八壁で十六羅漢を表現したものと思われる。ただし下層は上層以上に改修の跡が著しいため、現段階での断定は控えたい。

4．おわりに

塔湾塔の初層壁面には、上述のとおり、四方壁に如来を、四斜方壁に菩薩を据える独特の尊像の配置が認められる。これは、たとえば契丹の中京大塔や広済寺塔のように、金剛界大日如来と過去七仏を各壁に配置する形態[6]とは明らか

6　中京大塔は内モンゴル自治区赤峰市寧城県に、広済寺塔は遼寧省錦州市に現存する。ともに八角十三層の密檐式塼塔で、初層南壁に金剛界大日如来を、他の七壁に過去七仏（釈迦とそれ以前に出現した六人のブッダ）を配置する。これは契丹の訳経僧・慈賢の訳出した『妙吉祥平等秘密最上観門大教王経』の所説に基づくものと考えられる［藤原崇人2013：95-98］。

PL. 3 （上）塔湾塔初層南壁・PL. 4 （下）塔湾塔初層西北壁

PL. 5 （上）南壁基座上層の尊像・PL. 6 （下）塔湾塔南壁基座

に異なっている。当時の密檐式塼塔の初層壁面における尊像配置の多様性を解明するうえで、本仏塔は貴重な手がかりとなりえるものである。そのためには、まず経典所説や類例との照合のうえに、本仏塔初層壁面の各像を確実に同定し、当該の尊像配置の意味を明らかにすることが必要となる。これを今後の課題としたい。

【参考文献】

竹島卓一［1944］『遼金時代の建築と其仏像』龍文書局
竹島卓一・島田正郎［1976］『中国文化史蹟　増補　東北篇』法蔵館
武田和哉編［2006］『草原の王朝・契丹国（遼朝）の遺跡と文物』勉誠出版
藤原崇人［2013］「草海の仏教王国――石刻・仏塔文物に見る契丹の仏教」『契丹［遼］と10～12世紀の東部ユーラシア』勉誠出版、pp. 88-100
王建学ほか編［2002］『遼寧寺廟塔窟』遼寧美術出版社
国家文物局編［2009］『中国文物地図集　遼寧分冊』上・下、西安地図出版社
葉麗綏［2003］「遼陽現存良好的両座古塔――遼陽白塔和塔湾塔」『記者摇籃』2003(5)、p. 64